The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海外報告(1) <日本現代染織造形展>西独巡回展に出品参加して
Author(s)	中井, 貞次
Citation	デザイン理論. 1986, 25, p. 100-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

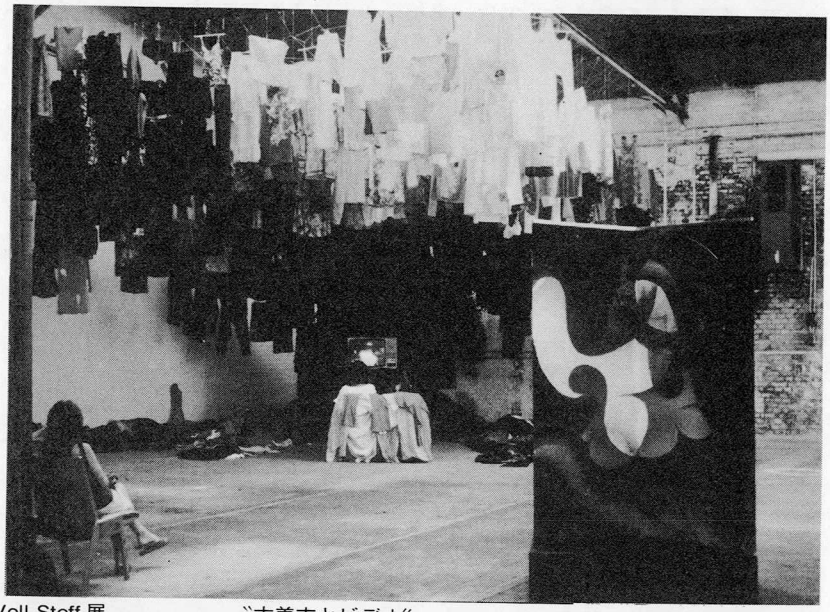
（海外報告）

〈日本現代染織造形展〉西独巡回展に出品参加して

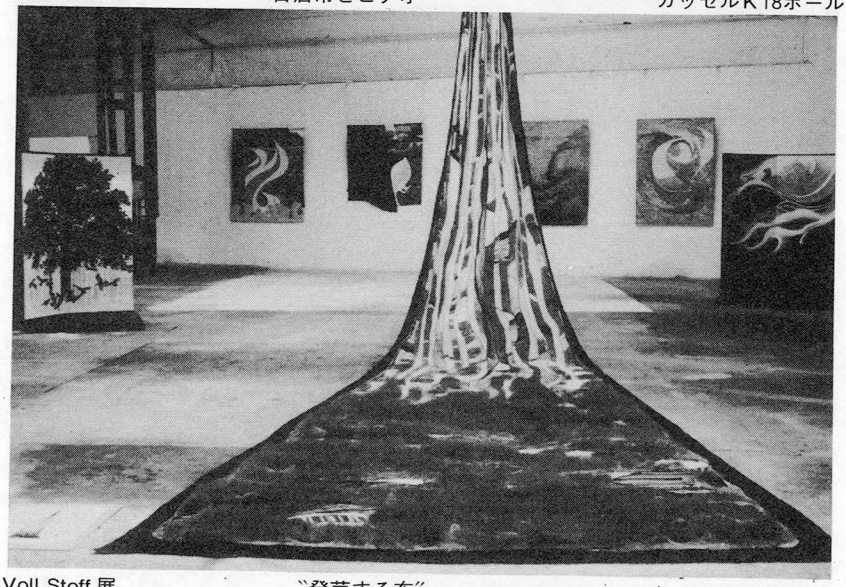
中　井　貞　次

昨今，繊維素材を駆使した表現の世界は，現代美術を席巻するかのようにみえる。所謂，ファイバー・ワークと称する分野で，それが嵩じてファイバー・アートとして国際的にも流行化現象を辿っている。それは，繊維素材のもつ素材感，他の素材に比類なき柔軟性，色彩性，触覚性，また，その変幻自在な空間性のようなものが，アートする人々の手で再認識されだしたのである。このようなアート分野の揺動が，テキスタイル・デザイン分野の活性化を促すことに繋がらないものだろうか。

来年は，スイスのローザンヌで第13回国際タピスリー・ビエンナーレが開催される。そのテーマは〈Fiberart goes back to the wall〉である。去る1983年の第11回展では，ファイバー・アートが創り出す〈環境〉を，1985年の第12回展では，〈彫刻〉としてのファイバー・アートを，そして，1987年は上述のように〈壁面〉に戻り行くファイバー・アートを指向。即ち，ビエンナーレでは模索試行しながら最終的には，繊維素材の持つ平面性を問い直そうとしたのである。



Voll Stoff 展　　〝古着市とビデオ〟　　カッセルK18ホール



Voll Stoff 展　　〝発芽する布〟　　カッセルK18ホール

一方，西ドイツのカッセルでは，来年，４年に１回の国際的に定評のある現代美術の催“ドキュメンタ”—Documenta—が開かれる。おそらく，このイヴェントでは様々な素材による多様な表現の世界が繰り広げられると思うが，ソフト素材の核として繊維素材が主役を演じるのではないだろうか。

その当地，カッセルのＫ18ホールで，今夏，“フォル・シュトッフ”—Voll Stoff—と称する我々の展覧会が開催された。この展覧会は，日・独合同の現代染織造形展で，日本側の作品30点は，日本現代染織造形協会の染織作家18名の制作になるもの。その内容は，二曲染色屏風，パネル，織物の壁掛けで，いずれも日本の風土に培われた新しいイメージをもつ作品群である。一方，ドイツ側の作品はカッセル総合大学のテキスタイル・プロジェクトの学生の作品50点であった。

会場となったＫ18ホールは，カッセル総合大学—Gesamthoschule Kassel—の付属建造物で，かってドイツ空軍の整備工場であったというレンガ建ての鉄骨構造，天井は高く，一部ガラス張りの2000㎡に及ぶスペースで，まさに，現代美術を展示するのに相応しいホール。学生達の作品は実験的な大作が多く，天を突き，地を這うように配置され，一方，我々の作品は屏風が多く，それらは特設の台の上に立体的に展示されていた。そんなことで，日・独の繊維素材を扱った表現の世界が，いろいろな面で好対照をみせ，話題を呼ぶ展覧会となった。

ドイツ側の展覧会の企画，運営に当ったカッセル総合大学のエル・アタール教授は，会場を一覧して，「日本の作品はサーフェスがたいへん美しく感動している。ヨーロッパの文化と日本の文化がコントラストされていて非常に興味深い。皆さんの作品には日本のいい伝統が遺(のこ)っているように思う。日本の染織作家が，それをどう考え，どのように制作したか知りたい」というのであった。

一方，ドイツ側の作品は，総じて表現の技術面においては未熟であったが，１点１点の作品のコンセプトは明解。例えば，天井から延々と垂れ下げられた

〈発芽する布〉では公害問題を，会場のコーナーを利用して吊り下げられた〈古着市とビデオ〉では，そのコントラストを通じて工業社会批判などをアッピール。その他〈巨大なコスチューム〉や〈音に揺らぐ白い布〉など，実に自由奔放な発想のもとに制作されていた。

後日，私は大学のプロダクト・デザイン科テキスタイル・プロジェクトのアトリエを見学する機会をもった。彼らの大学でのテキスタイル・デザインの学習は，ヨーロッパの伝統的な染織品の図案と技術の研究。実技としては産業に繋がるテキスタイルの図案の作成，そして，その図案の試織，試染などの仕事が中心であった。しかし，展覧会制作となると，全く目的，条件の枠を外した自由な仕事となっている。結局，これは，このような機会を把えてクリエイティヴな能力を培い，個性の発揚，とくに素材体験を通じてテキスタイル素材に対する感性を高めさせ，さらに，内在する素材の造形性の探索につとめさせようということであった。

振り返えれば，今回の我々の西独における展覧会は，ハイデルベルク大学の創立600年記念祭の一環行事として“日本週間”が組み込まれ，その参加要請を受けての開催に始まった。去る，２月15日，ハイデルベルク染織美術館で“日本現代染織造形展”をハイデルベルク大学総長ご夫妻，市長ご夫妻，ミュンヘン総領事ご夫妻のご臨席を得て華々しくオープン。６月４日まで好評裡にロングランとなった。会場はハイデルベルクの郊外，ツィーゲルハウゼンにあるマックス・ベルク社の染織美術館（木造３階建の瀟洒な館で，かって，ブラームスが演奏会を開いた由緒ある所）であった。作品は１階の四方の壁面と吹き抜けになった２階の手すりから壁掛けが吊り下げられ，如何にもヨーロッパ人のインテリアに対する感覚が吐露されたものとして興味深く見入ったものだった。

ハイデルベルク大学の創立600年記念祭のメインテーマは“伝統から未来へ”＝ Aus Tradition in die Zukunft ＝というものであった。ヨーロッパ諸国は，

今日もう一度，自国の歴史風土に培われた伝統の所産を見直し，そこから未来に繋がる真実を生み出そうとしている。そんなこともあってか，高度成長を短期に為し遂げた日本の不思議を文化を通じて解明したいと思うのだろうか。ハイデルベルク大学の創立600年祭の幕明けが，“日本週間”で始まったことは極めて印象的であった。デパートの外壁には鯉のぼりが吊り下げられ，日の丸に障子があしらわれたポスターが街頭に“Japan Woche”を告げていた。

２月14日，大学の旧講堂で記念式典が行われ，講演された宮沢駐独大使は，その中で，ブルーノ・タウトの“日本美の再発見”を引用され，日本とドイツの文化交流の深さを解かれていたのである。今日，日本は再び研究の最も興味ある対象となってきている。

染織作品に関しても，ファイバー・アートは国際的に普遍化されてきているが，我々の蠟(ろう)染，型絵染の技法によるアートの分野は，まだまだ未開拓の状態で，それだけに興味津々(しんしん)の受け止め方をされていたように思う。それは，カッセル展の前夜祭の翌日，私が当会場で行ったスライドによる講演の反応を見ても頷(うなず)けた。ことに，日本古来の染織，刺繍，摺箔，辻ケ花などの技法に対する熱心な質問がくり返されたのである。

この度の冬と夏の２度にわたる西独展の経験から考えさせられることは，国際的なそれぞれの場で通用し得るものは，その作品のもつ個性，それが国，風土，伝統を背景に構築されていなければならないということ。いみじくも，“伝統から未来へ”というテーマは，われわれ日本の作家にとっても重要課題の一つだといえる。

我々の西独巡回展は，カッセル以後，10月下旬から11月下旬までシュツットガルトで，12月中旬から来年１月中旬まではミュンヘンで開催される予定である。

そして，これを機会に両国のテキスタイル・アート，デザイン分野の交流が活発化されることを願うのみである。

京都市立芸術大学美術学部教授